

次代社会を見すえた人権教育の推進 ～ユニバーサルデザインの物的・人的・授業作りの充実を通して～

茨城県稲敷郡阿見町立君原小学校 小林 信行

I 現状と課題

1 現状認識

A I や入管法の改正に象徴される情報化・グローバル化といった変化が予想を超えて進展する社会においても、子供たちが主体的に向き合い、広い視野をもって、自分の人生を切り拓いていける力を身につけて行くことを重視して今回の学習指導要領は改訂されている。

人権問題も同じように広がり複雑さを見せ、今後どのようになっていくか予想が困難である。

また、今回の新学習指導要領の実施に伴い、いわゆる働き方改革には逆行する形で授業時間の増加が行われた。

つまり、学校で様々な人権問題に一つ一つ対応することは、不可能に近いのが現状である。

そこで、「次代社会を見すえた人権教育」を進めるに当たっては、授業を中心とした教育課程全体を通して人権教育の基礎となる人権感覚（「自分の大切さとともに、他の人の大切さを認められる」）を培うことが、効率的・効果的ではないかと考えた。

そして、人権感覚の育成を「ユニバーサルデザイン」（以下UDと表記）をキーワードに取り組むことにした。

2 課題分析・アプローチの視点

次代社会で予想される多種・多様な人権教育を推進するには、単発の授業や行事で成果を上げることに限界がある。また、現在の教育課程の中で人権教育に十分な時間をかけることは、新学習指導要領での授業時間増、働き方改革を進める現状ではたいへん難しい。

そこで、UDの授業作り・教育環境（人的・物的）作りを授業の中に取り入れることで、教職員や子供たちの中に自然と人権感覚が染み渡り、教育効果が上がるのではないかと考えた。

II 研究の概要

1 取組の視点

(1) 教育課程編成における人権教育の共通理解

UDの視点を入れた学校の人権教育全体計画を作成し、教師に人権教育の意識をもたせる。

(2) UDの授業・教育環境作り

人権感覚の育成のためにUDの視点に立った授業作り、教育環境（人的・物的）作りを行う。

2 取組の実際

(1) 人権感覚育成のための人権教育全体計画の作成

人権教育全体計画にUDの視点を「学習・環境作り」「学年・学級経営」に盛り込み共通理解を図った。

また、校内研究（算数）とも関連させた。

(2) UDの授業行為（君原小授業スタイル）

UDの授業行為10項目を年度当初に教師に示し、授業時にそれらを常に意識できるようにした。

教師がどの子供にも優しく分かりやすい授業を心がけられるようになり、その授業から子供たちも自分が大切にされていることを実感できるようにした。

(3) 阿見町授業スタンダードと宿題改革

算数において教科書を効果的に活用し、授業時間内に適用問題・スキルまで学習して習得を目指した。

また、宿題の負担を減らすとともに、教師も宿題点検から解放され、時間的余裕をもてるようになった。

(4) 校内研修

① 模擬授業研修（教師の人権感覚の向上）

UDの授業行為を習得するために校内で1回30分程度の模擬授業研修を実施した。

② 指導案形式の工夫（人権感覚育成の授業計画）

書き進めていくと研究テーマであるUDの授業を意識した指導案が出来上がるようにした。

(5) UDの教育環境（物的・人的）作り

① 教室環境作り（視覚・聴覚刺激の制限）

教室の前面の掲示物を最小限にしたり、水槽のポンプの電源を昼間はオフにしたりした。

② 失敗をしてもいい雰囲気学級の作り

人権感覚の育成のためには、まず学級で「失敗をしても大丈夫」という学級の雰囲気作りを行った。

③ 誰にでも優しい教材・教具

授業時間内で活用でき、個人差に応じた対応ができる漢字スキル・計算スキルを全学年で採用した。

また、合理的配慮に応じた教具も準備し、必要に応じて活用できるようにした。

III 成果と課題

1 成果

(1) 人権感覚の育成を全体計画に示し、校内研究と関連させ授業を中心に実施したことで、教師のUDの授業の技量が向上し、人権感覚を高めることができた。

(2) 保護者アンケートから「児童は、思いやりがある」、「学校は良いところを認めてくれている」が98%を超えている。

2 課題

(1) 校内研究で取り組んだ算数での成果は大きかったが、他の教科への広がりを感じた。

(2) 合理的配慮も含め教材・教具の工夫をしたが、そのユースウェアの研修が不足したため、十分な活用ができなかった。

IV 提言

人権教育の要となる人権感覚の育成は、学校の中心である授業の中で行うのが、次代社会で予想される多様な人権と多忙な学校教育環境の中では、効率的・効果的である。